

感情と公共性（その1）

—— M.ヌスバウム『Hiding from Humanity』に寄せて ——

植 村 恒 一 郎

The Emotions as the Grounds of Public Actions (1)

—— Some Comments on M.Nussbaum's "Hiding from Humanity" ——

UEMURA Tsuneichiro

I はじめに

現代アメリカのリベラル派哲学者マーサ・ヌスバウムは、2004年に *Hiding from Humanity——Disgust, Shame and the Law* という本を刊行した。2010年にはその邦訳、『感情と法——現代アメリカ社会の政治的リベラリズム』（慶応大学出版会）が出版された。本書は、「怒り」「嫌悪」「羞恥」などのネガティブな感情の本性を分析し、概念的に十分な区別を与えることによって、これらの感情が我々の生において果たす役割、とりわけ公共的行為やジェンダー文脈における重要な機能を考察している。そして、それらが法の規範・実践においてどのような位置づけで「あるべきか」を提案しており、公共哲学およびジェンダー論における、近年の大きな成果であるといえよう。しかし最初に注意しておくことがある。原著のタイトル *Hiding from Humanity——Disgust, Shame and the Law* を見てみよう。直訳すれば、「人間性から目を背けること」であるが、これでは意味がよく分らない。一方、邦訳タイトル『感情と法』では、原著のニュアンスが伝わってこない。だが、それは仕方がないとも言える。ヌスバウムは「人間性 humanity」という語を、普通とは違った意味に用いているので、直訳したらますます分らなくなってしまうからだ。原著のタイトル *Hiding from Humanity——Disgust, Shame and the Law* が意味しているのは、「人間の動物性や不完全さから目を背け、隠そうとすることが、嫌悪や羞恥という感情の本性である」ということである。つまりヌスバウムは、「人間性 humanity」という語を、「人間であることの不完全さ、弱さ、すなわち、脆弱性、傷つきやすさ vulnerability」の意味で使っている。ヌスバウムにおいて、「脆弱性 vulnerability」という概念は、彼女の哲学の全体を方向付ける重要な基礎概念であり、人間の脆弱性が「嫌悪」「恥辱」という感情を作り出しているというのが、本書の基本テーゼなのである。

本書は、大部の法哲学の書物であり、同性愛差別やジェンダー差別をめぐる数多くの裁判の判例を詳細に検討している。それは本書の重要な要素であるが、数も多く論点が多岐にわたるので、論文の全体を二つに分けて後半部で扱うことにしたい。前半部である本稿は、「怒り」「嫌悪」「羞恥」という感情の本質についてのヌスバウムの見解を検討し、最後にそれらの感情の公共的行為との関係の基本線を確認することにしたい。

II 人間の「脆弱性 vulnerability」と感情の本性、感情は認知的価値を持つ

アリストテレス以来、「感情」は繰り返し論じられてきた。古典学者でもあるヌスバウムは、アリストテレス、セネカ、ルソー、アダム・スミス、そしてフロイトなど、感情について深い洞察を与えた西洋哲学の遺産を縦横に活用する。そして彼女の感情論の特徴は、人間の弱さ、脆弱性 (vulnera-

bility) を感情論の基本に据える点にある。これは、ある意味でルソー的な観点とも言えるだろう。ヌスバウムは本書の冒頭で、ストア派が、人間が自分でコントロールできない感情というものの価値を低いものとみて、感情から解放されようと試みたことを批判する。そして、それと対照的なのがルソーであり、「同情、悲嘆、恐怖、怒りのような感情は、そうした意味において、私たちが共通の人間性を有していることを思い起こさせてくれる本質的で価値ある督促状である」(p8)と述べているからである。彼女はまず、感情と人間の「脆弱性」との基本的関係を、次のように述べる。

脆弱性 vulnerability という観念は、感情の観念と密接に結びついている。感情は、これらの脆弱な部分への反応である。感情とは、私たちが被ってきた損害、被るだろう損害、あるいは幸運にも被らずにすんだ損害を表現する反応である。(p7)

人間はその「脆弱性」ゆえに、外界に対してある種の仕方でも反応し、態度を取らなければならない。これはそれほど奇妙な理解ではない。たとえば、デカルトの『情念論』もまた、感情の役割をそのように捉えていた。デカルトによれば、我々はまず外界の状況が今までとは変わり、何か新しいものが現われたことに気付く。これが、第一の基本感情である「驚き」である。次に、その新しく出現した対象について、受け容れるか拒否するかを瞬時に決めるのが「好き」「嫌い」の感情である⁽¹⁾。我々は通常、外部で何が起きているのかをまず知り、次にどうしようかしばらく考え、そしておもむろに行動するという、認識→熟考→行為というモデルを考えてしまう。そのような場合もたしかにあるが、対象が何であるかよく分からなくても、瞬時に態度を決めなければならないこともたくさんある。それが自分にとって良いことなのか、それとも悪いことなのか、まずこれが、態度決定にもっとも重要である。とすれば、それを教えてくれるのが感情であると考えられる。たとえば、腐ったものはいやな臭いがする。この嫌悪感が、それを食べるのを躊躇させる。とすれば、感情は、対象に対して我々がどう行動すればよいのかを教えてくれるのだから、感情そのものが何らかの認知的価値を持つのではないだろうか。ヌスバウムは、西洋の哲学的伝統が主要な感情に含めているものをリストアップする。それは、喜び joy、悲嘆 grief、恐れ fear、怒り anger、憎しみ hatred、憐れみ pity や同情 compassion、ねたみ envy、そねみ jealousy、望み hope、罪悪感 guilt、感謝の念 gratitude、羞恥心 shame、嫌悪感 disgust、愛 love などである(p29)。そして次のように述べる。

恐怖心は、未来に差し迫った良くない可能性についての信念を含む。怒りは、不当になされた被害についての信念を含み、憐れみは、他人がひどく苦しんでいることに関する信念を含む。同じことが、いわゆる肯定的感情についても言える。愛、喜び、感謝の念、希望などは、それぞれに特徴的な信念に言及せず、ただ「快い感じ feeling」に関連づけたのでは、互いに区別できない。(p35)

これらは、飢えや渇きといった身体的欲求 appetite であるとか、苛立ちやある種の憂鬱さのような、対象を持たない気分 mood とは異なる。(p30)

我々は、「感情 emotion」を、身体に感じる「感じ feeling」「気分 mood」とはっきり区別しなければならない。その理由は、「感情」は必ず対象についての何らかの認知を含んでいるが、「感じ」「気分」はそれを含んでいないからである。感情は、何らかの対象、たとえば危害を加えられる可能性など、「志向的对象」(p32)を持っている。だからそれは、われわれの行動を導くのである。別の言葉で言えば、「感情は対象に関する信念を含む」(p33)と言ってもよい。

信念は、感情にとって本質的な基礎である。感情のタイプはそれぞれ特定の信念群と結びついているので、もしその中の信念を持たなければ当の感情を持たないし、その信念を持つことを止めればその感情を持つことをやめることとなる。(p34)

このように感情には、その認知的な要素としての「信念」が含まれる。とすれば、感情についての我々の考察は、それぞれの感情がどのような信念を含んでいるかを中心としなければならない。身体に感じる「感じ」や「気分」のようなものとして感情を捉えるならば、それぞれの感情が持つ本質的な差異が見落とされてしまう。愛の感情は、「……を愛する」感情、喜びの感情は、「……を喜ぶ」感情であるから、そこには必ず「……を」の部分があるいは信念として含まれている。だが、感情について重要なことはこれだけではない。ヌスバウムは、感情は、自分にとって重要なもの、価値あるものについてしか生じないという。感情は、自分を中心とした遠近法的構造をもっており、自分に関係の深いものほど感情を喚起する。我々は家族や身近な人の死を悲しむが、同じように世界中の死者を悲しむわけではない。

すべての感情はその対象を、取るに足らないものとしてではなく、重大なものとして評価している。……感情の対象に見られる価値は、その人自身の幸福や、その人が愛着を感じているグループの幸福と関連している。人は世界のあらゆる惨事を恐れるわけではない。……私たちがあらかじめ自分の目的や目標の図式の中で一定の重要性を与えてきたことについてだけ、私たちは感情を持つ。(p36f.)

もう一つ重要な感情の特性は、感情そのものが評価の対象になることである。感情は、信念と深く関わっているから、その信念が誤っていれば、その感情は不適切だったことになる。たとえば間違った情報や思い込みにもとづいて怒ったことが分かった場合、その怒りは不適切だったと反省される。また、感情は、それが生じる因果的状況やコンテキストがあるから、感情の生じた状況の如何によっては、そこに生じた感情が不適切になることもある。たとえば、ほとんどの人が笑ってすます些細なことにブチ切れて激しく怒ったとすれば、その怒りは奇異なものが見られよう。このように感情は、関連する信念や因果的状況によって、その適否が評価されるのだが、身体的欲求や気分にはそうしたことはない。飢えや渇き、憂鬱な気分などは、適切不適切の評価を受けることはないのである。

感情自体も評価されうる。私たちは、ある人の感情が、正しい信念に基づいているとか、間違った信念に基づいているとか指摘できるし、そして、それとは独立に、理に適った信念に基づいているとか、理に適っていない信念に基づいているとか指摘できる。(p40)

信念に影響を与えることで感情にも影響を与えることができる。……たとえば憎しみの感情であれば、憎しみの元になっている、事実と価値両方の事柄に関する間違った信念をいったん取り除いてしまえば(あるいは、そんな信念を初めから持たない方がはるかによいが)、人々は感情の面で変わることができる。(p44f.)

以上のように、人間はその脆弱性ゆえに自己への危害を避けるために絶えず外界に機敏に反応することが感情の本質であること、そのような感情は認知的対象を持つこと、そして感情の対象は自分との関わりが深いこと、そして、信念や因果的状況との関連で感情はそれ自体が評価されること、

これらを確認したうえで、以下に重要な感情を詳しく見ていこう。

III 怒り

我々は「怒り」と「嫌悪」をあまり区別せずに混同することも多いが、ヌスバウムは両者はまったく異なる感情であり、正確に区別しなければならないと言う。

怒りはしばしば理に適った感情でありうる。怒りの一般的説明は、アリストテレスのものが使える。それによれば、他人の不当な行為によって、何らかの深刻な危害や損害を与えられ、そしてその行為は不注意ではなく進んでなされたのだ、という信念が、怒りには含まれている。(p84f.)

「怒り」という感情のもっとも重要な特性は、「他人の不正な行為」という認知内容が含まれていることである。我々は地震やにわか雨、あるいは、赤ん坊がコップを割ったことに対して怒りはしない。他人の「行為」に対して怒るとき、我々は他人を判断力を備えた人格として捉えている。つまり、怒りという感情は高度な認知的内容を備えている。たとえば我々は、入試問題の事前漏洩、点数の改ざん、書類の偽造、詐欺などの不正や不公平に対しては、強い怒りを覚える。それは、人間が守らなければならない共通のルールを破ったことに対する怒りである。だから、怒りは「理に適った reasonable」な感情であり、人は怒るべきときには怒らなければならない。この意味で、怒りは正当な感情なのである。そしてまた、怒りは、不正や不当な行為を行った人物を、そうしないこともできた正常な人間とみなすことを前提にしている。つまり、怒りは、人間と人間の正常な関係や規範に関する重要な感情なのである。「怒り」はミルの「他者危害禁止則」との関連でも重要である。ミルは、正義は、それが侵されたときに感じる怒りの感情に支えられていると考えていた⁽²⁾。というのも、正義に関する領域は、身体・生命の安全、財産、名誉などが傷つけられないこと、移動、発言の自由など、人間の基本的な権利に関するものであり、それが侵犯されることに強い怒りを感じるものが、こうした人間の「基本財」を守ることに必要だからである。つまり「怒り」は、社会の公共性を支える大切な感情なのである。

もちろん、「怒り」が「理に適っていない」場合もたくさんある。

怒りそれ自体は、信頼が置けるものでも、置けないものでもないし、理に適うものでも、適っていないものでもない。私たちが理に適っていないと一貫して主張することができるのは、特定の対象について特定の人がある特定の怒りについてだけである。(p94)

「怒り」は、怒っている人の対象認知や信念によって、あるいは、それが生じる因果的状況やコンテキストによって、いくらでも「不適切な怒り」になりうる。誤った認知や偏見、性急な判断のもとづく怒りは「理に適った」怒りではない。だから、我々は「怒り一般」ではなく、特定の状況において、特定の個人が持つ怒りを評価するのだからなければならない。

IV 嫌悪

次にヌスバウムが検討するのは「嫌悪(感) disgust」である。嫌悪は、哺乳類としてのヒトが進

化してくる過程に一定の根拠をもつ感情であり、それゆえ生物としての人間のあり方に深く関る感情なので、注意深く考察しなければならない。ヌスバウムは嫌悪を次のように記述する。

嫌悪感、ほとんどの人間の生活の中に強く働いている感情である。嫌悪感によって、私たちの親密さの度合いは決まってくる。身だしなみに気を配るといような日常の決まりごととは、多くの場合この感情に基づいている。たとえば、私たちは体を洗い、排尿や排便を人の目から隠そうとし、歯磨き粉やうがい薬を使って周りを不快にさせる匂いを洗い流し、誰も見ていない時に脇の匂いを嗅ぎ、鼻糞が鼻毛について目立っていないか確認するために鏡をじっと見たりするのだが、私たちは嫌悪感に基づいてこうした日常的な習慣を身につけるのである。多くの点で私たちの社会関係を決めているのも、また嫌悪を催させるものとそれをさまざまな方法で取り除こうとする振る舞いである。嫌悪を催させる動物的なものへの対処法は、社会の習慣を生み出すものとして広く浸透している源泉である。 (p91)

ヌスバウムの嫌悪の理解は、嫌悪について包括的で深い研究をしたウィリアム・ミラーの分析にもとづいている⁽⁹⁾。ヌスバウムの引用するミラーの見解によれば、嫌悪感には明確な認知内容を持っている。ミラーは、身体の排泄物、腐敗など傷んだ食物、死体の三つを嫌悪の「一次対象」と呼び、それらは進化論的起源を持つと考える。進化論的起源を持つというのは、これらの「一次対象」に嫌悪感を持つことが、その個体の維持と次世代の再生産にとってプラスに働いたので、嫌悪の感情をヒトは持つようになったということである。しかし、人間は嫌悪感を、「一次対象」だけでなく、それ以外のものにも拡張してゆく。この拡張は社会的なものであり、進化論的な起源を持っていない。このような嫌悪の「一次対象」以外のものへの拡張にこそ、嫌悪という感情が持つ固有の問題性を示している。ミラーによれば、「嫌悪」の中心概念は「汚濁 contamination」にある。つまり、排泄物、腐敗した食物、死体などは、それに触れるもの（物や者）に汚れを伝染させてゆく。自分が汚染されたり、社会が汚染されると考えるのである。これが人種差別や部落差別の根底にある。ある時期のアメリカの一部では、黒人がプールで泳ぐとプールが汚染されるとみなされた。また日本の部落差別においても、家畜の解体作業や皮なめしなど動物の死体に触れることが、その職業に従事する人々を汚染させると見なされた。また、ののしり言葉（「糞っ！」「畜生！」）が排泄物や動物をストレートに言及しているのも、日本だけでなく、各国に共通して見られる現象である。

ヌスバウムによれば、嫌悪感には「身体の境界」に関係している (p113)。たとえば、口、鼻、肛門、性器、皮膚などである。そのような場所は、唾液、鼻汁、汗、排泄物、精液、月経血など動物的な分泌物が避けがたく現れてしまう場所だからだ。たとえば、唾液は自分の口中にあるときは不潔なものと思わないのに、それを外部に吐いたとたん、汚いものとみなす。身体の境界を越えたとなん、否定的なものになる。そのように「身体の境界」が問題になるのは、動物はその生命活動を営む限り、外部から酸素や栄養を摂取する代わりに、かならず排泄物を外部に排出するからであり、その排出の場が「身体の境界」だからである。我々はなぜか、口、鼻、肛門、性器、皮膚などを「おぞましい」もの、「グロテスクな」ものを感じる時がある。その理由は、自らの動物的活動をそこに見出しているからである。我々は、自らの口、鼻、肛門、性器、皮膚などの汚れを神経質に恐れ、そのような場所を注意深く管理しなければならないと過剰に意識することになる。また、これは論文の後半（次稿）で見るのだが、人間の性行為もまた口、鼻、肛門、性器、皮膚、毛髪などが 関っており、そのことが、「わいせつ」概念やポルノグラフィ、同性愛などに関して「嫌悪感」が論拠とされることの問題を引き起こしている。

私たちは、自分たちと人間以外の動物、もしくは自分のたちと自分たち自身の動物性との間の境界を取り締まることに関心を寄せている。……涙は人間の身体の分泌物だが、嫌悪されていない。それはおそらく、涙は人間独特のものと考えられ、それゆえ私たちが動物と共有するものを思い起こさせないからである。対照的に、排泄物や鼻汁、精液、その他の動物的な身体的分泌物は、汚濁をもたらすとみなされる。……そして私たちは、そういった身体の分泌物と定期的に接触する人々を、汚染されているとみなす。……嫌悪感の核心は（人間を含めた）動物の老廃物である。私たちはそのような老廃物を、自分を劣化させるものと見なす。……ミラーが表現するように、「究極的に、すべての嫌悪感を生じさせる基盤は私たちなのである——つまり、私たちは生き、そして死ぬが、生から死への過程は汚らしいものであり、自らに対する疑念を呼び起こし、隣人を恐怖させるような物質や臭いを発生させるのである。(p113f.)

ここで指摘されているように、我々の排泄物は、我々自身が死へと向っていることを示すものでもある。というのは、自己の肉体から排出された老廃物を、自己を劣化させるものとみなすことは、当の老廃物自体が、自分の肉体の一部だったわけだから、それは、自己の肉体そのものが不可避免的に老廃物に転化することを意味するからである。死とは、我々の肉体そのものが一直線に腐敗することである。「死＝肉体の腐敗」という観点から見れば、排泄物や分泌物は、肉体が腐敗するする姿を、日々眼前に先取りして、小規模に実演しているものとみなすことができる。自己の排泄物や分泌物を嫌悪し恐れることは、自己の肉体の腐敗＝死を恐れることと根底で繋がっている。そしてそれは人間の尊厳を無残に打ち砕く究極の運命でもある。そして、そのように自らの身体の腐敗と死を直視することは、我々にとって苦痛であり、もし可能ならば眼を背けることができればと願う。つまり嫌悪感とは、「現に自己であるところのものから距離を取ろうとする」(p262) 我々自身の無意識の働きとも考えられる。嫌悪には、死＝動物の運命からできれば逃れたいという、深い自己欺瞞が含まれている。

嫌悪の感情とは、根深く自己欺瞞的な感情であり、その本質からして自己欺瞞的なのである。というのは、その作用は、日常生活における向き合いがたい私たち自身の事実を隠してしまうからである。(p263)

嫌悪の感情の持つ自己欺瞞的性格こそ、この感情が行為の根拠として本質的な問題を引き起こす理由である。人間は、自分の中の醜いものを他人になすりつけて、自分が無垢であるかのように思いたがる。「嫌悪」は、同性愛を刑罰の対象とする論拠になったばかりではなく、誰にも危害を加えないものを処罰あるいは禁じる論拠になってきた。「わいせつ」概念もまた「嫌悪」を論拠としている。なぜ、誰にも危害を加えないのに処罰や禁止の対象になると考えられるのか。これは性やポルノグラフィとも関連する論点なので後であらためて論じることになる。

V 羞恥

嫌悪が、人間の動物性にストレートに関する感情であったのに対して、「羞恥」は、人間の直接動物的なレベルとは異なる固有の「自我のあり方」に基づく感情である。ヌスパウムは、「羞恥」を次のように記述する。

嫌悪感と同様に、羞恥は、私たちの社会生活の至る所に見られる感情である。……私たちは、人生を経てゆくに依りて、自分の弱点を他の長所で埋め合わせたり、それを克服しようと鍛錬したり、あるいは否応なく欠点があらわになってしまうような状況を避けたりするなりして、実際に自分の欠点を覆い隠すことを学んでいく。私たちの多くは、ほとんどの時間、「正常に・規範的に normal」見えるようにと努力している。そして時に自分の「異常な・規範的でない abnormal」欠点が否応なく露わになると、赤面して恥じ入り、自分自身を覆い隠し、自分の眼を背けるのである。恥辱とは、こうした欠点の露呈に対して生じる苦痛の感情である。(p221)

羞恥とは、当然できなければいけないと見なされていることができない、という意味での自分の欠点が露わになることの苦痛の感情である。嫌悪感が、どうしてもなく露呈する自らの動物性への拒否感情であったのと違って、人間のあり方の「規範性」からの逸脱の感情が、羞恥なのである。

羞恥心は、人間であることに本来的に備わっている緊張、つまり、自分自身が有限である一方、にもかかわらず途方もない要求と期待によって刻印された存在でもあるということの自覚、この自覚に含まれている緊張と折り合いをつけるための大変、不安定な方法として働いている。(この点では、マックス・シェーラーによる感情の古典的な考察に同意したい。)(p222)

恥辱は、[嫌悪に比べると]より巧妙に成立している。この感情はさまざまなかたちの目標や理想に関して人を駆り立てるが、こうした理想や目標には時に重要なものも含まれている。……とはいえ、恥辱の起源は、完全であろうとする欲望、あるいは完全に支配しようとする欲望、そういった原始的な欲望に存する。それゆえこの感情は潜在的に、他者の軽視につながっており、またナルシズム達成の妨げになるようなものに対して牙をむくような、ある種の攻撃性につながっている。(p236)

ここでヌスバウムが、恥辱は「より巧妙に成立している」と述べていることに注目しよう。嫌悪は我々の動物性に直接に関っているので、そのネガティブな側面は見やすいものであった。しかし羞恥は違う。羞恥は何よりも、我々が「完全であろう」とする欲望、つまり肯定的なものに貫かれている。それゆえ、羞恥は何か、我々を向上させるもの、我々に規範を意識させるものとして、建設的で肯定的な感情であるかのように理解される。というのも、羞恥は、我々に期待され要求されるものに自分が応えられないという感情であるが、このことは裏返せば、我々は何かを要求されたり期待されるに値する存在であり、しかもそれに応えられると自分も他人も思っているからこそ、応えられない自分が恥ずかしいからである。嫌悪の場合は、自分の排泄物や肉体がおぞましいとしても、そのおぞましさに自分の責任はないが、羞恥の場合は、要求に応えられない自分が悪いという、何か責任のようなものが自分にあるように感じられてしまう。ここに羞恥の感情が持つ複雑な性格がある。

ヌスバウムが羞恥心の分析のために参照・依拠するのは、アメリカの対象関係論学派の精神分析家ウィニコットである(その成果は、実証的な発達心理学とも整合的と言われる)。ウィニコットは、幼時段階における「原初的羞恥心」を重視する。ヒトは、他の哺乳類と違って、生れたばかりの赤ん坊はまったく無力で、完全に他者に依存しなければ生きられない。乳児

が他者に完全に依存して生きる長期の無力の期間に、原始的な感情が芽生えると考えられるからである。乳児は、「空腹の苦痛の状態だけでなく、また〔授乳による〕快適さと充足との交互の感覚を経験している」(p230)。乳児はフロイトによって「赤ん坊陛下」とも呼ばれた。乳児は、他の哺乳動物の誕生直後の赤ん坊と違って、自分ではなにもやらない。王様が自分は何もしないですべてを召使にやらせるように、すべてを周囲の大人にやらせる。乳児は、生きるための手段のすべてを他者に依存している。しかしすべてを他者に依存することは両義的な事態でもある。つまり、授乳は他者からもたらせるので、それが期待通りにならないという苦痛を必ず経験する。当然あるべき授乳がなされない。先行する期待が裏切られるという原初的な苦痛の感覚が、羞恥の原型なのである。「幼児における羞恥心は、何らかの期待や喜びの中断によってもたらされる苦痛の情緒として定義される。」(p234)

羞恥心は、生後一年間にわたって徐々に現われるのではないだろうか。またおそらく十分に成熟した感情が到来するのは、分離の感覚が完成した後に限られるのではないだろうか。……注目したいのは、羞恥心がけっして自尊心 self-regard の減少を命じはしないという点である。ある意味で、羞恥心とは、本質的に自尊心を背景として要するものなのである。人が、自分の不完全さや、自分のつまらなさのしるしを前に尻込みしたり、それを覆い隠してしまったりするのは、何かしらの点で自分が完全で、価値があるということを期待しているから。……より一般化して言えば、ここで理解されている限りの羞恥心とは、何らかの理想的な状態に達しえなかった感覚に対する苦痛の感情なのである。羞恥心とは、ある特定の行為に関するというよりは、むしろ自己全体に関するものである（一方、罪悪感の向けられる主たる対象は、人物全体というよりも、特定の行為である）。(p235)

だが、問題は実はここから始まる。期待した授乳がなされない、来てほしい母親が来ないなどの苦痛を乳児が経験するとしても、そのことと、羞恥が問題的感情になることとの間には、まだ大きな距離がある。なぜ羞恥は、人間が成長するに従って問題的感情になるのだろうか。乳児は、初めは、自分が何もやらず、すべて周囲の大人がやってくれるという“王様状態”にあるが、自分が動けるようになるに従って、自分と外界との関係は変わってくる。するとこの変化の中で、自分の“王様状態”とそれに固有の快と苦の感情も、変わらざるをえない。つまり、乳児は自らのナルシズムを乗り越えなければならぬのだが、この過程でさまざまな問題が生じるのである。ヌスパウムは、ナルシズムの乗り越えのもっとも望ましい形態を以下のように記述する。

子どもの全能感に対して適切な反応を返し、しっかりした世話をする両親（あるいは他の保護者の）対応の能力は、やがて徐々に育まれていくことになる相互依存や信頼関係のための枠組みを構築する。ひとたび、他人が頼れるものであるということ、そして、まったくの無力な状態の中で見捨てられたりはしないのだということが理解されたならば、幼児はその全能感を徐々に緩め、常に関心を向けてほしいという欲求を次第に緩めていくのである。(p238 f.)

真に成熟した関係へと向う中で、いかにしてナルシズムが乗り越えられるのか。……子どもは、保護者の完全な支配〔＝赤ん坊陛下、全能感〕という要求を不適切なものみなして、徐々にこれを断念できるようになっていかななくてはならない。……子どもが、悪しき望みと悪しき行いを、善き望みと善き行いによって贖うことができると学ぶ時、その支配の断念に

は創造性も伴うのである。……世界の中心たろうとするまさにその欲求が別の人間を傷つけてしまっていたのだと気がつく瞬間から、多くの愛と創造が始まるのだとメラニー・クラインは鋭く指摘する。他者もまた生活する権利を持ち、自身の意図を携えているのだと理解していることを示しつつ、いまや子どもは他者のために何かをしようとし始める。……愛は、ナルシスティックな融合や、支配せんとする激怒を通じてではなく、交流や相互性を通じて徐々に理解されていく。 (p240)

そうはいつでも、これはかなり困難な過程である。ヌスバウムはブルーストの『失われた時を求めて』を例に、次のように述べる。

人生における初期のナルシズムの刻印は大変根深い。ブルーストは、この刻印は克服されえないものであると考え、後に生じるいっさいの愛は本質的に、かつて支配されることを拒んだその人、つまり母親を支配せんとする試みであると考えている。(p240)

VI 「細やかなやりとり」の出来ない男の子

ヌスバウムは、原始的羞恥心からの脱却がうまくできず、ナルシズムの乗り越えに失敗した実例として、ウィニコットの患者Bと、20歳前後のJ.S.ミルを挙げる。まず、ウィニコットにおける患者Bの事例から見てみよう。医学部学生Bは、愛情の欠けた母親、完全性だけを執拗に求める母親に育児されたので、母親に甘えることができず、母親を支配したいという欲望が、女性に対する敵意という形で成人した後まで残ってしまった。「女性に対する敵意」が本人もそれと気付かずに、いわば通奏低音のように患者Bの心を支配するので、彼は女性とうまく付き合っていくことができな。彼は、結婚をした後にも不全感に悩まされ、セラピーを受けることになった。Bは、自分の妻の外見、容貌や振る舞いについてウィニコットに尋ねられても、ほとんど何も答えられなかった。毎日一緒に暮らしていても、何も見ていないのである。そしてまた、Bは、誰もが親しい人に対して使うファーストネームをほとんど使うことができなかった。誰に対しても親近感を持ってないのだ。Bに対して、ウィニコットは、次のようにセラピーを行った。

ウィニコットは、現実の人間関係においては「細やかなやりとり subtle interchange」の要素があるのだと彼に告げる。……ウィニコットは次のように結論する。愛とは、多くのものを意味している。「けれどもそこには必ず、この細やかなやりとりの経験が含まれていなくてはならないし、そういった関係の中でこそ、人は愛を経験し、また現に愛していると言えるのである。」……先に見たように、羞恥心はいかなる点においてもけっして自尊心を損なうものではない。明るみに出された自分の支配の欠如や不完全性の前で人が尻込みしたり、あるいはそれらを隠そうとしたりするのは、ひとえに自己に支配を求めたりあるいは完全性を期待したりするからなのだ。先に示されたように、適切な成長過程においては、子どもは、欠如を恥じるべきではないのだと学んでいき、不完全な者同士の柔軟で創造的な「細やかなやりとり」に有益な喜びを感じるようになっていく。 (p243)

ヌスバウムによれば、患者Bのようにナルシズムの乗り越えに失敗するのは、そのほとんどが男子である。なぜそうなのだろうか、また、どのような問題がそこに伏在しているのだろうか。

有能さと正常さの薄っぺらな見せかけを作り出して世に示してはいるが、他方で自分のうちなる欠乏をうまく隠してしまうことによって、発達が滞り、恥辱にいつそう苦しめられている患者たち——けっしてすべてではないが、そのほとんどが男性である——臨床的な文献は、そんな患者で溢れかえっている……女性たちは、成熟とは継続的な相互依存の関係を含むものであり、また欠乏を示すような感情は妥当なものなのだというメッセージを親から受け取っていく。その一方で男性は、母親への依存が悪しきものであると教えられ、また母親からの分離や自立こそが成熟であると教え込まれ、往々にして彼らは自らの感受性や遊ぶ能力について恥を感じるようになっていく。(p246f.)

男子は、自分の弱点を隠すのが巧くなるに従って、「細やかなやりとり」が苦手になる。そこで起きているのは、感情が豊かに育まれないという不全である。そのまま成人した男性でも、能力が高い人は仕事において成功し、高い社会的地位に付いている人も多いので、「細やかなやりとり」ができず、とりわけ女性と感情の交流ができないとしても、そのことが“病理的な”問題として意識されることはまずない。「そういう性格なんだ、そういう男はたくさんいる」という一般論で、普通は片付けられてしまう。しかしヌスバウムは、そこに教育あるいは社会における底深いジェンダー・バイアスを見出す。男の子に感情が育まれないのは、男の子は感情に流されず、強くなければならないという、社会がもつ男子への期待があり、男の子は幼児からそのように教育されるからである。

何より問題なのは、誰も少年たちに内的世界を吟味あるいはそれを表現するように勧めないことなのだ。彼らは人の気持ちや内的世界に関してひどく無知であるが、それは大人たちが彼らにそれ以上を期待しないからなのである。幼い子どもが感情について母親に質問する時 (たとえば「どうしてジョニーは泣いているの?」といった)、母親は女の子には詳しく答える一方で、男の子には、簡潔で、踏み込まない答えをしがちだという。母親は、女の子がこうした興味をもつことを望んでいるはいるが、男の子に対しては期待していないのである。学校に行くようになるまでは、男の子は自分の悲しみや気持ちといったものについてまったく見当もつかず、また人の気持ちに共感することもかなり困難になってしまっている。彼らはすでに、欠乏や悲しみが恥ずべきものであると、思い込んでしまっているのだ。彼らに常に送られているメッセージと云えば、耐えよ、こらえよ、男たれ、ということなのだから。……女性的であるような一切の側面を、つまり感情、とりわけ悲しみや、欠乏、共感などを軽蔑する傾向が見られる。……好戦的であるのも傲慢であるのも大いに結構であるが、「軟弱」なのはよろしくないというわけだ。……多くの少年たちの生活に多様なかたちで刻み付けられている恥辱の経験は、敵意へと変じていく。つまり、女性に対する敵意、自分自身の傷つきやすい部分に対する敵意、またしばしば自分の所属する文化の支配層に対する敵意へと向っていくのである。(p256f.)

ヌスバウムは、そのような男性の特徴として、文学への興味がなことを指摘する。

彼らは、気持ちのやりとりや相手への信頼を必要とするような本当の親密さを得ることはできない。というのも、彼らは自分の内的な欠乏に関心に向けるすべを知らず、またこの欠乏に向き合うこともできないまま、他人を信頼することから目を背けているからである。同じ理由から彼らは概して、文学や詩など、内的世界をめぐる展開される作品や、内的世界における努力に対して何ら感動を覚えない。……オットー・カンバークのある患者は、自分の

内面的な生活にもまた他者の内面性にもまったく興味を持つことができず、いつも文学作品を馬鹿にしていた。「堅固で冷たく、有用な事実」しか受け入れなかったのである。(p247f.)

Ⅶ J.S.ミルの場合

文学を愛することによって、そして、女性の力によって、「細やかなやりとり」が苦手なロボットのような人格形成から救われた例が、哲学者 J.S.ミルの事例である。ミルは、厳格な父と、あまりに多くの子どもの出産のために精根尽き果て母によって育てられたので、ロボットのような受身の感覚を抱くようになり、いかなる能動的な内的感覚も感じられなくなっていくという精神の危機を体験した。しかし、ハリエット・テイラーという稀有の女性と出会い、結婚することによって救われ、立ち直ることができた。20歳の頃、ミルは精神の危機に陥っていたが、彼はフランス文学を愛していたので、マルモンテルの小説『思い出』の中のある箇所を読んで、涙を流し、決定的な回心を体験した。彼は、「私は愛の欠如と恐怖のうちに生まれた」が、「この瞬間から私の重荷は軽くなった」と『自伝』で自ら述べている (p251f.)。ミルは、一般に功利主義の哲学者とみなされているが、実は内面の価値を非常に強調した人であることを忘れてはならない。ヌスバウムは、ミルが「快樂計算」で有名なベンサムを厳しく批判していることを述べている。

ミルは功利主義者のベンサムを「自らの感情を育むことなく、文学を喜ぶこともなかった幼稚な人間」と評している。(p253)

英国文化よりフランスの文化を好むような積極的な発言からも、彼がいかに感情表現の自由を重んじていたのか、自らのうちに閉ざされていた喜怒哀楽を解き放ってくれるような自由を重んじていたのか窺い知ることができる。その哲学的な歩みの中で、ミルは一貫して内的世界の認識と育成を重んじ、また政治的自由の環境を重んじた。ただ政治的な自由だけが、力強い、感情豊かな文化を生み出しうると感じていたのである。(p253)

ミルの事例は、感情豊かな文化の大切さと同時に、そのような文化を育てる教育についても重要な問題提起を行っている。男子に感情の発育不全が多くみられ、「細やかなやりとり」を不得手とする者が多いとすれば、文学や芸術に親しむことの重要性にあらためて注意を向けなければならないだろう。大学の文学部に男子学生が少ないことは、単に個人的な興味の問題ではなく、社会が男子をそのように育ててきたというジェンダー・バイアスの問題なのである。

Ⅷ ジェンダーと感情の公共性

人間の知的能力を示すとされる指標には、たとえば学力偏差値、TOEIC、各種の検定試験の成績などがあるだろう。だが、感情については、そのような“客観的”指標が問題になることはない。しかしそのことは感情が人間の生活や、社会のあり方にとって重要でないということの意味しない。それどころか、我々一人一人が、よく生きるために、あるいは幸福に生きるためには、感情が豊かに育まれていることが不可欠ではないだろうか。これまでリベラリズムの哲学は、ロールズの「無知のヴェール」に代表されるように、社会契約の主体となる「抽象的な人間」あるいは「負荷なき自我」に基づいて人間や社会を考えているという批判が、たとえばコミュニタリアンなどから出されてきた。ヌスバウムの『Hiding from Humanity』は、そのような批判に正面から応えたものと

みることができる。本稿でみたように、「怒り」「嫌悪」「羞恥」という基本感情を捉え直すことによって、それらがどのような行為の基礎になるか、またなりうるかが明らかにされた。それを簡単に整理すると以下のようになるだろう。

まず「怒り」は、他者の不正行為に対するものだから、社会の規範を支える大切な感情となりうる。先にⅢで見たように、ミルは正義という価値は市民の感情によって支えられる必要があると考えた。その意味で「怒り」は公共性を支える重要な感情である。

それに対して、「嫌悪」はそうではない。嫌悪は我々自身の動物性から目を背けようとする自己欺瞞的な要素を含む感情であり、それを他者に投影し人格を否定するという非常に深刻な破壊的機能がある。黒人やユダヤ人などに対する人種差別、日本の部落差別、同性愛者差別、広範に見られる女性嫌悪(=ミソジニー)、そして子どもたちの「いじめ」の理由づけ、政治的立場を異にする少数派への罵倒(「ゴミ」「バイキン」等々)、罵り言葉(「糞っ」「ムカつく」「キモい」)など、嫌悪の感情は、他者に向けられ、他者に投影され、他者を傷つける。したがって、嫌悪の感情は決して公共的行為の基礎となつてはいけない感情であり、我々が慎重にコントロールしなければならない感情である。

「羞恥」は、非常に複雑な問題を引き起こす感情である。ヌスバウムは、それをジェンダー・バイアスの問題として提起した⁽⁴⁾。男と女の関係は、私的なものとされているが、「男らしさ」を求める社会的な規範が男子の豊かな感情の育みを妨げ、「細やかなやりとり」の不得手な男性を大量に再生産しているとすれば、それは公共的な問題でもある。ミルは、感情豊かな文化は、政治的自由を重視する民主主義社会によって生み出されると同時に、それ自身が民主主義社会を支える一要素でもあると考えた。ヌスバウムは、この社会をより生きやすい社会にしていくためには、男性がもっと「細やかなやりとり」ができるようにならなければならないと言う。感情の公共性は、このような次元にも及ぶのである。[続く]

註

*本稿で用いたヌスバウムのテキストは以下の通り。引用した文章は訳書による。頁数も訳書のもの。下線部はすべて植村による。

- ・マーサ・C・ヌスバウム『感情と法——現代アメリカ社会の政治的リベラリズム』(河野哲也監訳、慶応大学出版会、2010)
- ・Martha C. Nussbaum: *Hiding from Humanity——Disgust, Shame and the Law* (Princeton University Press、2004)
- (1) デカルト『情念論』§53～§57
- (2) J.S.ミル『功利主義論』第5章
- (3) たとえば、ウィリアム・ミラーの次のような嫌悪研究の著作。
 - ・William I. Miller: *Humiliation* (Cornell University Press、1993)
 - ・William I. Miller: *The Anatomy of Disgust* (Harvard University Press、1997)
- (4) 本書は、アメリカにおける「羞恥刑」の問題も大きなテーマにしているが、それは論文の後半である次稿で扱う。